様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５２０４１９

研究課題名（和文）借用語音韻論の理論的研究

研究課題名（英文）Theoretical Studies of Loanword Phonology

研究代表者
田端　敏幸（Tabata, Toshiyuki）

千葉大学・高等教育研究機構・教授

研究者番号：００１３５２３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：日本語の複合動詞形成とそのアクセント型の理論分析をおこなった。異なる動詞語幹を組み合わせて新たな動詞を形成する過程は、借用語処理と平行性があると考えたためである。日本語の動詞語幹はアクセントの有無が動詞ごとに決まっていて、そのアクセント情報は転成名詞に引き継がれる。しかし、複合動詞はアクセント動詞として機能するが、その転成名詞は必ず平板式になる。この事実を「複合動詞には語彙情報としてのアクセントが存在しない」という仮説によって説明した。複合動詞が固有のアクセントを欠くにもかかわらず、見かけ上はアクセント動詞としてふるまう理由は「複合語はアクセントをもつ」という制約に求めることができる。

研究成果の概要（英文）：It is known that Japanese simplex verbs can create their own derived nouns in a systematic way, where accentual property associated with each verb (accented or unaccented) is automatically transmitted to its derived noun. The present study focuses on why it is that compound verbs, although they appear and behave as being accented, can have only unaccented derived nouns. It is to be argued that that the apparent accent (characterized by pitch drop in Japanese) observed in compound verbs is not lexically specified or inherent but introduced by the morpho-phpnological constraint that requires that compound words (either nouns or verbs) should be accented. That is why derived nouns from compound verbs are systematically unaccented: there is no lexical accentin compound verbs. The process is similar to the process thatloanwords undergo: loanwords are treated as a sequence of sounds, which will have default accent when they are incorporated into Japanese.

研究分野：言語学（音韻論）

キーワード：最適性理論　複合動詞　アクセント　形態構造　不完全指定　借用語

１．研究開始当初の背景

最適性理論などの研究が進み、各種の音韻現象に新たな観点から分析をおこなえるような状況が出現した。日本語が借用語をどのような仕組みで処理しているのかということを研究課題にした。借用語処理は、音韻過程として、漢語も英語も基本的には同じ仕組みでおこなわれると考えられるからである。

例えば、漢字音を取り入れる過程でおこなわれた母音挿入は基本的に/u/であった。語幹母音が/e/ あるいは/i/の場合にはこの母音がもつ [-back] に調和して挿入母音が/i/になったわけである。このような仕組みは英語の語彙を借用する場合にも基本的には生きている。漢字音であれ英語であれ、これらを受け入れる場合には受け入れ側に存在しない音連鎖を処理する必要がある。

借用語のこのような側面に関しては、これまでも研究がおこなわれてきた（拙稿「借用語音韻論の諸相」『ことばの対照』岸本秀樹編 H22 くろしお出版 pp. 297 - 308.）借用語処理にはこのような分節音韻論の現象のみならず、アクセント面でも興味深い現象が存在する。よく知られているように、和語でも漢語でも平板式のものがかなりの割合で存在する。例えば「漢語」という語自体が平板式であることを想起すべきであろう。

ここで「漢」「語」を単独で発音すると、それは単なる「音」として処理され、ピッチ下降を伴う（いわゆる起伏式）音声形式になる。しかし、この二つの漢字音を組み合わせて「漢語」とすればピッチ下降のない「平板式」になるわけである。このようなことは、語を借用する場合に生じるプロセスに一定のヒントを与えるに違いない。つまり、単独で発音すれば音読みの漢字音はピッチ下降を伴って発音されるが、このピッチ下降は音韻処理で導入されるものであって、この漢字音が語彙情報としてもっているものではないのではなかろうかということになる。語彙借用は基本的に文法情報や音情報を捨象した「音連鎖」として受け入れ、受け入れ側はそれに対して一定の処理（例えば、借用語は名詞として受け入れる、とかデフォルトのアクセントを付与するとか）をおこなっていると考えられるのである。つまり、一般の語彙項目はあらかじめ話者のレキシコンに登録されているが、借用語の文法情報や音韻特性は統語部門や音韻部門が導入するものだということになる。このような言語処理はどのような言語でもおこなっている可能性があり、日本語の分析をおこなうことで理論面での新知見をえることができるだろうと思われる。

２．研究の目的

借用語の音韻処理は分節音のレベル（母音挿入など）にとどまらず、アクセントの面でも興味深い現象が存在する。例えば、受け入れ側の日本語には平板式の語彙が多く存在する（これが無標だとも考えられてきた経緯がある）のに対し、借用語では起伏式になるのが無標状態であるといったことである。このような状態がなぜ生じるのかを理論的に解明し、どのような仕組みが借用語処理に機能しているのかを明らかにするのが研究目的である。平板式が多数を占める和語や漢語でも、複合語は「複合語アクセント付与」という独立した仕組みでアクセントが与えられることはよく知られている。これが意味するところは、複合語の要素として語を用いる場合、個々の要素が持つアクセント情報は次のような場合を除いて複合語には引き継がれないということである。

(1) [N1 + N2] において
N2 が複合名詞の主要部で、かつ、末尾および次末以外にアクセントがある場合には N2 のアクセントが複合名詞のアクセントになる。

(2) [N1 + N2] において
N2 のアクセントを複合語に反映させるためには N2 が十分な長さをもつ必要がある（3モーラ以上）。以上のような条件を満足しない場合は次の例が示すように、N2 のアクセントとは別の位置、すなわち N1 と N2 の切れ目で末尾から3モーラ目に近い音節にアクセントが置かれる。例えば(3)は主要部の「あめ(雨)」が 2 音節･2 モーラで頭高であるが、長さが十分でないためにアクセントにゆれがみられるし、(4)が示すように語彙情報の中高（こころ）は複合語には反映されない。

(3) にわか＋あめ
にわか＋あめ

(4) おんな＋こころ

語彙借用には上でみたような「デフォルト値」を与えるしくみが存在しているはずである。デフォルト値を与える仕組みが機能している現象をみつけだしそこに合理的な説明を与えるのが目的である。

３．研究の方法

日本語がおこなっている語彙借用の過程は、他の言語でも観察されるような仕組みに基づいているのではないかという見通しをつけて、特にアクセントに関する現象を検討した。動詞は転成名詞と呼ばれる形態をもち、アクセント情報を引き継ぐことが知られている。

(1) a．「登る」～「登り」
　　b．「歩く」～「歩き」

上の例で「登る」は無アクセント動詞、「歩く」はアクセント動詞である。その転成名詞に注目すると、アクセント動詞からは尾高の転成名詞が派生され、無アクセント動詞からは平板式（無アクセント）の転成名詞が派生される。ここで、(2)に示すような複合動詞に注目すると、複合動詞は必ずアクセント動詞のようにふるまうという特徴があることがわかる。興味深いことには、その複合動詞から転成名詞を派生させると、(3)に示すように転成名詞はかならず平板式になるのである。

(2) a．かけ＋あがる
　　b．たべ＋あるく
(3)　a．かけあがり
　　b．たべあるき

複合動詞とその転成名詞が示すアクセントの関係を統一的に説明する方法を検討し、ここに作用しているのが「デフォルトアクセント」付与という仕組みであって、複合動詞には語彙情報としてのアクセントが存在しないという理論化をおこなった。これは、漢字音を単独で発音する際に生じるアクセントのようなものと平行関係にある。つまり、複合動詞のアクセントは構成要素の動詞語幹がもたらすのではなくデフォルト値（複合語はアクセントをもたなければならない）が実現したものなのである。複合語であるという形態情報によって自動的にもたらされるのが「複合動詞アクセント」であり、複合動詞には転成名詞に引き継がれるアクセントは存在しないのである。カタカナで表記される借用語も形態情報がなければ、単なる「音連鎖」という形式で処理され、これに「アクセントをもつのが望ましい」という音韻制約が作用して外来語アクセントという規則的なアクセント型（デフォルトアクセント）が出現すると考えられる。

４．研究成果

学会や研究会において、デフォルトアクセント付与、という見通しに基づく研究過程を発表し、最終年度に、借用語処理のプロセスと同じものが、日本語の複合動詞アクセントで用いられているという結論に至った。つまり複合動詞は、その構成要素がもつ語彙情報を捨て去り（つまり固有のアクセントはなくなる）、複合語が従う制約（複合語はアクセントをもつべきである）に従ってアクセントを得るということになる。複合動詞にはアクセント情報が存在しないため、その転成名詞は当然「平板式」になるというのが結論である。これを学会および学会誌等で発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

１．田端敏幸「複合動詞のアクセント特性について」『現代音韻論の動向（日本音韻論学会 20 周年記念論文集』H.28.9.10 本音韻論学会編 pp. 88-91.【査読有】

２．田端敏幸「日本語の複合動詞とその転成名詞のアクセント」『音韻研究 20』H.29.3.31 日本音韻論学会 pp. 137-144.【査読有】

〔学会発表〕（計５件）

１．田端敏幸「弱母音の連続を回避する音韻現象にについて」H25.3.16　TCP（東京音韻論研究会）（東京大学駒場キャンパス）

２．田端敏幸「二字漢語の複合語アクセント」日本言語学会　H25.11.23　（神戸市外語大）

３．田端敏幸「ラテン語とギリシャ語の Enclitic」H26.2.14 福岡大学「音声学・音韻論講演会」　【招聘】

４．田端敏幸「日本語複合動詞のアクセント特性について」日本音韻論学会シンポジウム H28.6.24 首都大学東京秋葉原サテライト【招聘】

５．田端敏幸・平地裕章 A theoretical approach to alphabet initialisms in Japanese. H29.3.9 （立命館大学朱雀キャンパス）

〔図書〕（計１　件）

『音韻研究の新展開』田中真一（他）編：開拓社 pp.156-168. H29.3.25 田端敏幸「日本語複合動詞のアクセント特性について」

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田端敏幸（Tabata, Toshiyuki）
千葉大学・高等教育研究機構・教授
研究者番号：00135237

(2)研究分担者
（なし）

研究者番号：（　　）

(3)連携研究者
（なし）

研究者番号：

(4)研究協力者　　（なし）